



9回裏、馬場さんから受け継いだミットを手に、マウンドの櫻井投手(左)に声を掛ける捕手の奥村選手

託されたミットで臨んだ一戦

「先輩の思いを力に」

14日の全国高校野球選手権2回戦。本県代表の八戸学院光星主将で捕手の奥村幸大選手(3年)は、尊敬する一つの先輩、馬場龍星さん(日体大1年)から託されたミットをつけ、大一番に臨んだ。どのミットよりもしっくりなじむ、自分にとっての宝物。勝利は逃したが「ミットに込められた先輩たちの思いも力に変えて戦えた」とすがすがしく振り返った。(本田海輝)

光星主将 奥村捕手、奮闘

忘れもしない昨年夏の青森大会決勝・対三沢商戦。延長十二回、馬場さんは投手のワンバウンドしたボールをつかみ切れず、サヨナラ負けを喫した。「お前たちの代こそ、必ず甲子園に行ってくれ」。その後、馬場さんからミットと願いを託された。それは、元の色が分からなくなるほど土で汚れ、変色していた。だが、自分にとって何よりも価値がある、そして重みのあるミットだった。「誰よりもしっくり練習していた馬場さんでも、最後はあいう形が夏が終わった。馬場さん以上に練習しつかり取り組んでいこうと、あらためて思った」。傷むのを防ぐため、練習ではめめるのを避け、公式戦でのみ使ってきた。試合中、ひもが切れることが何度もあつたが、そのたび自分で補修してきた。試合の前日、ミットを磨くとよみがえり、あの敗戦の悪夢。だからこそ、体を張ってボールを止めたいことを肝に銘じていた。

球場の応援 「東邦一色」 九回裏

九回裏、4点を追う東邦の攻撃が始まると、一塁側アルプススタンドに陣取る同校吹奏楽部の演奏に合わせ、球場全体に大きな拍手が鳴り響き、球場はまるで東邦の応援一色に。観客のつくりだした異様なまでのムードの中で、八学光星は、まさかの大逆転を喫した。

球場で観戦した県高野連の高橋聡理事長は「プロ野球でも聞いたことのないような応援で、恐怖感すら覚えた。あの状況の中で、平常心で野球をやれというのは難しい。光星はよく耐えて頑張ったと思う」とナイフをいたわった。高橋理事長は次に大阪代表・履正社の試合が控えていたことや、東邦の話題の主砲藤嶋をもつ一打席見たいという期待感で、関西の一般の高校野球ファンが東邦の応援に引き込まれ

じた。この日はワンバウンドのボールを体を使って後ろへ送らないうつ心掛けた。初回と七回には盗塁も刺しチームを勢いづけた。試合後は涙を一切見せず、泣き崩れる主戦の櫻井一樹投手らの背中にそっと手を当て、励ました。

この日、馬場さんは所用で現地観戦はできなかったが、スタンドでは昨年夏の他のレギュラーたちが声援を送った。4番を務めた中

ていったのでは、と推測する。「(球場)全員が敵なのかと思った」という光星の主戦・櫻井が4連打を浴び、サヨナラ負けに終わった。ネット上では「光星がかわいそ」「高野連は注意すべき」などといった書き込みが相次いだ。

東邦高校吹奏楽部は、1929年に前身の「健児音楽隊」が創設され、野球部よりも1年長い90年近い伝統を誇る名門。最後まであきらめない東邦ナインを後押しする堂々たる応援が、観客の共感を呼んだことは確かだ。

だが、同校の袴田克彦事務部長ですら「あれは異様な感じ。うちの味方をしてくれていたとはいえ、威圧感すらあった」と驚いた様子。「まったく意図しなかったこと。どっぴう訳だったのか」と首をひねっていた。

(外崎英明)

崎寿希也さん(奈良学園大1年)は「本当は新しい、きれいなミットを使いたいはず。僕たちの思いを背負ってプレーしてくれてうれしい」と語った。試合後、奥村選手は言葉を選びながら話した。「甲子園は自分の力以上のものを出せる素晴らしい所だ。野球の怖さを知った場所でもあった。先輩には頑張っほしい」。2度のサヨナラ負けを経験したミット。これからも大切に使い続けるつもりだ。